



繪本梅花冰裂

八

花
180
8



13
180
8



閑き閑き今日ハ鐘もまきく積りけしき文とあつて一盃を傾け
 積る由物酒にてはらへるまじり今より王川の別荘まで駕を担げ
 のへん夏とひねがふと。りよる山はあがいと媚くる文章のまじり不審
 まがらやうの鐘く聴くは度細く別荘へ来りて見る山は遠く
 よりも一倍程ひをこらへ美酒佳肴を風流の番は盛つて所懐きと
 おきまら客待類は欄のまじりまきく赤い酒をまきくせ微舞さげん
 ふく閑公はむらひまきく物もまきくねと舞の徒然なる
 まきく途へまのせしよるまきく初ハ遅く来るの妾は待絶せしよ
 由公おやいと強面と卿あぞ閑公ハ忽魂天外は飛んで恍惚とて
 心中酔るが如く答んよまきくす只唯とて座よりけり山は遠く

又盃を挙ぐ閑公はまきく。閑公はりよる山はあがいと媚くる
 婿く閑公を数盃まきくむくるよ小紫ハ原朱ひは物のまじり一向
 媚たる酒をわけて閑公を挑みるがら志はつよ酒をまきくむる程は
 大まきく碓町にて十二分の碓町をまきく小紫はむらひ某まのり
 由身が許へ通へども由身はりよる強面耳管待と竟は二夜の枕を
 かたむけり閑公の意氣地るまじり病のまじり待て三浦
 やあつて縁と終合へまきたまは遠くよ由身を購ひて我が
 病の花とまきく為るまじり最早里の意氣地もあきり今より板席を
 ぞよよて我望をかみへるまじりと膝よのまじりかき口は小紫も
 微笑するは是まきく強面のまじりまきくは尋常のまじりぬゆ

夫の言より一たび只一時の戯れなりと却て思ひの申さる種なれ
 誠宜し一夏の休みのるるに其時よりいはずに誰さより一夏の休
 んだるるを思ふつうのみなきはまはるひのほど好まの黄令を
 きて妻を力と贖ひぬる赤ひたるしはまを志摩も由ひに従ひま
 らすべし去々未君の妻が心を疑ひぬる故に物のつらみ強
 のつゝ最理よりと恨つけまづ困心は細を聴く其のうへに最早
 夫婦も同前なるが何まを強まへまといけまづ小紫曰まづら
 い君は回ひまのしはまの何のしはまらまを思ふのつらやま
 今君は回ひまのしはまの何のしはまらまを思ふのつらやま
 訊まのしはまの常は九後を秘著して私書を放くまの何ま
 正不審後ハ婦女の嗜むものか一あまづ君二世とう言せし女子

亦逢ふまでの記念をえと取らるるのめりあまらざる。倘や
 左様の人もありるといふ妻只今君の心はまを思ふのつらま
 後竟ふ見弄のつら必まを思ふのつらま。其のつらまを秘著
 の縁を詳し語と改せのつらと責問ま。困心ハお笑ひ恰利
 らるるまがハ女を思ふまを思ふのつらまを思ふのつらま。去
 らけ後を秘著するハまを思ふのつらまを思ふのつらま。今
 爰もく説明しつて後自まを思ふのつらまを思ふのつらま。其
 子細をかくのつらまを思ふのつらま。怪けまを思ふのつらま。推量
 の如くまを思ふのつらま。其のつらまを思ふのつらま。困心
 詮方ま誠や女子と小人申まのつらま。造るハ大切の物まを思
 へ



片時も乳母をたもてて死物もさすともたれはまよふことかひ思はる時
 時が間ぬきもあづけつらうすべし其うらり我もまよふ縁とちらうと
 見とちひさるぬきの腕の入癩推八妻と彫るるまよふと消して
 用ひと我名を彫るまよひとて小紫の妻が腕よさるのいほ
 そまよ君の思ひつらふてや有らんと見せどとまよを無理な体まよ
 上る二の腕は麻のうまどの毛のまよ斑の痣のありけをまよるぬ
 ぬハ駿然とて大に驚かす暫か間小紫が頼うちまよのそ有ける
 漸あつて自己か丸の腕とまよるとあげと見するふ困心か腕も又
 小紫と同一形の痣ありけまよ小紫もまよるまよら其縁故を
 らまよ此然とて居りける其時困心小紫まよひまよ振其方ハ我

実の妹もつらう顔の丸くまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
 丸ハ原來捨子るまよハ実の父母をまよるハ及理之抑吾まよ父ハ
 彼の高潜師直つ後まよ鹿目平次左のまよとて武士まよまよる親
 二年父の傍列武庫川まよ討死する我ハまよ時終まよ四七まよあり
 丸乳母が信まよのまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
 育まよ成長旧鳥袋文太と姓名を改めるとまよまよまよまよまよ
 恒乳母が物語まよ父平次左のまよまよの娘まよ情をうけて懐妊まよ
 一人の女子まよのまよけが世のまよのまよとて捨まよ麻の目の家
 の血脈の着ハ男女まよまよまよ麻の斑もまよ似る痣まよまよまよまよ
 ちてまよまよのまよのまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

汝が後よは悲あるうらら八永妹は疑ひる。けしきが最早今を
 を羨慕のしほで姉とあるうらら八永姉の交りたる一糸一はのち
 あつて思ひのどまるべし。そまは付く藤と其方と詔ある指子なる。
 権八といふ少年とそ我郷岡原信州は漂泊せし折うら子細めて打景
 廿一唐琴浦右門がやうう。彼の子四喜湯と呼る男子も渠と
 世活まるうら八永の唐琴の屋敷は不縁の者なるべし。鬼ても角ても
 生かたての枕と高かきうた奴等あるが。汝兄は身許にて付まぐ。
 世はく山紫のの中は思ふやう。借ハ吾ま権八の敵とねらひるふ。
 景文太といふものこそ岡八めて我実の兄あつあつけらう。この何とせ
 悲しやと暫時途方よくまける。信と心付岡八はむらひ初てはける。

我がまは性今うとて匹夫の種さうと思ひし。よさる中徳ある人の子
 ろうがはは終朽果んもはらうらうら兄身心を令一大美を企てまの栄
 花と極めんと國入の二世と言ふ。一は権八ぬらうまでえ来父母の
 救へるまといひるもあつなげ奈何も渠をたあせし。まてあき
 兄上のあつらうら八永とせしと思ふる。むらむらぬくは身の手。のう
 腰刀と焼くままを貸す。その二の山をわらうら。て権八子四喜
 等とまむびきとせし。おをらるる最易くと倍る。むらむらぬくは身の手。
 二十て大いむむび。汝そのむらむら。我大望の成終せんと。道なきあり。豊
 渠をよけむ。は損。あつた。まのまら。て。刀と。山。後
 志て岡八は。取らう。むらむら。むらむら。前。茂。隠れぬ。

梅花春水卷之二

十七

前おの如くする。みどはるる。とまの。二箇を。あざむきたる。ば。
 増一と。思ふ。まゝ。死に。つら。ぬ。妻が。命。我。夫。推。八。の。め。の。よ。
 かつ。死。ら。せ。め。の。申。次。一。通。の。使。り。の。さ。う。一。今日。も。君。の。
 發。の。ま。せ。國。心。を。招。き。酒。と。志。の。吞。は。さ。る。の。ま。い。と。い。の。り。を。奉。
 妻。が。右。の。腕。の。痣。を。と。り。け。自。分。の。痣。を。ま。は。さ。と。見。せ。ひ。ひ。は。渠。が。痣。
 あ。も。同。い。形。の。痣。あ。る。ゆ。え。い。と。い。ふ。妻。の。あ。や。く。た。ら。ぬ。渠。を。殺。す。と。い。ふ。
 と。い。ふ。と。い。ふ。困。心。と。い。ふ。世。を。あ。ぶ。奴。の。名。實。の。先。年。高。階。師。庫。と。は。る。
 津。の。国。武。庫。川。よ。り。失。は。る。庫。目。平。次。左。の。一。子。ゆ。く。旧。鳥。養。文。太。と。ま。
 名。を。あ。り。妻。と。り。は。あ。ら。ま。の。腕。の。痣。を。て。分。明。は。ら。り。の。い。う。入。り。
 縁。と。い。は。と。い。け。る。う。よ。の。す。る。推。し。と。ら。い。の。女。年。と。て。我。が。先。年。

信州。よ。り。ま。は。ら。り。の。お。り。子。細。の。あ。ら。ま。泉。井。一。唐。琴。浦。右。の。と。い。ふ。
 者。の。父。家。の。者。の。ま。は。我。妻。の。ま。は。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 我。の。ま。は。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 う。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 る。刀。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 お。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 関。せ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 を。妻。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。
 敵。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。

ろらんの恩ひもよらぬ兄の美理をまんとすまづ夫の操たる
 操を全めせんとすまづ是等の美理は遠のりしも憂へし
 武勇あがたかきあや入の死ね存命がた妾が命敵と名
 権八君の由りかたりけりかと操を連へまの世に世の功と
 きて兄と一むぐされ拮据は世の縁は薄くとも未だ未だ同
 聖は未だ世の世の勢とさう結ひしは権八君と四美あぬ
 共徳ははのりし取たてしとらむとて終るは秋の暮るる由
 の音のいささかさけける始終は権八の悲歎の泪もせむ
 ちが宿り願ふとらしむる景文太夫と実の山姥が兄あて有
 兄は代と我は代と志感さるる海もあつたまのいしつら

知るるるが。ちよふのりも有へきよ不便の者の為の果やと目とあは
 きは世の縁はうすくとも未だ未だ永切くともなまは是とけ世の思ひ
 又清く成仏は脱せし実の親もあらざるも勿推しる育上り源
 傍や油助がゆきさるるさざさうらむがえ我は後いむと立身出世する
 とも誓て本妻をわらふまづと言つて刀を直し誓をさし切
 たらひさるる祀近き驛山の逸月寺の住僧は我本国信陽は
 誓ひるひ一物我と師才のちるまは這由と詳は物落り
 誓言と山姥の死骸共徳彼の逸月寺へ葬つて一ツの塚もま
 母美塚と号け末の世までも権八といふ風流雄小宗と情死せしを
 埋せせし塚まといひいからむ世のあがけんとせむと理又

秘林春外卷之二

廿一

ニツハ皆老の契ちぎとこめしこもら生なまてハ室むろと同一どうい死してハ穴あなと
 共ともままささるる樹ちひひののままぬぬ比ひ翼よく塚づかの名なをを残のこししるるババ死しぬぬるる方かたののああららししるる
 公こうかかりりああももるるああららんんうう字じ四し清せいららううるるままはは斗とららふふべべとと破やぶらられれるる有ありりはは嬌うれ
 氣けはは只ただ伏ふ洋やうむむたたららしし今いまもも尚なほ好この喜よろこのの人ひと荊け棘きよくのの林はやしはは貞まこと婦めかけ互あ
 のの壁かべははままささるる驩う山さんはは残のこるる比ひ翼よく塚づかのの周しゅう縁えん形かたちととままららししけけりりととままん
 語こととと傳つたへへぬぬ。

梅花春水卷之二終

梅花春水叙

唐山たうざんはは昔むかしにに海うみ東とう朝てう花か葉えつ果くわ母ぼ子しにに更さらももいいてて逝しんせせ
 稗はい官くわん者しや流りゆうのの字じもも其その冠かんまるまるもも其その名なはは山東しやんとんにに在ありり
 おお母ぼはは昔むかしのの昔むかしよりより母ぼををああははれれててたたららししるる事こともも
 京きやう傳でんはは名なををいいててああららししるる者ものああららししるる小こ幡ばん小こ事じ次じがが安あ接せつ沼ま
 はは花はなののほほとと且かついいてて入いるる路みちももああららししるる猶なほ事こと表あらわはは雷らいとと
 そそののおおももいいるる者ものももああららししるる善ぜん玉ぎよく思おもひひももああららししるる事こともも

此や〜或は逢夢石の腹筋とよ〜と〜
巻首と〜著述半の行〜棟は元於大山
小説百有全部悉く枚挙と〜
その中よ李園の雜劇と翻案と〜梅の由縁
物語と〜前編既よ世の行〜事久〜
ともい〜後編は結房の〜
書房の某先生よ〜著述と催役せ〜

竟稿と〜
予曰醒齋先生は新高島案の〜
形と〜裁と〜錦の破と〜
予曰醒齋先生は新高島案の〜
形と〜裁と〜錦の破と〜
予曰醒齋先生は新高島案の〜
形と〜裁と〜錦の破と〜

事もあつていよいよ独り筆を採るまひ福を
たのむからいひすゝ光をせしむる貴人あつても
第^{うや}と深^{こほ}まじいふる^の原^{もと}来^{より}活^{くわく}業^{ぎやう}簡^{かん}補^ほ書^{しよ}と終^ひ目^め
市^{いち}中^{ちゆう}とのけり^の夜^よの通^{とほ}宵^{せう}札^{しやく}の向^{むか}ひ^の尚^{なほ}俗^{ぞく}用^{よう}の
澤^{さわ}あれたが十^{じゆ}八^{はち}九^くと校^{きやう}訂^{てい}も門^{もん}生^{せい}寺^じの澤^{さわ}亭^{てい}
も唯^{ただ}あまらせし波^{なみ}やま^の渠^{みち}も従^{したが}来^り醉^{すい}翁^{おう}懶^{らん}去^き
け事^{こと}のまご^の吞^の代^{だい}保^ほしき^の筆^{ひで}とれど意^い駒^{こま}人^{にん}

独^{ひとり}ひ^ひ中^{ちゆう}提^{てい}ひ^ひの^のけ^けを十^{じゆ}日^{にち}廿^{にじゆ}日^{にち}も著^{ちやく}述^{しゆ}二^に向^{むか}柳^{りゆう}
揚^あげ^げ先^{せん}の^の法^{ぽう}を^をの^のあ^あ後^ごの^の自^じ色^{しき}の^の書^{しよ}い^いも^も
さ^さも^も覺^{かく}の^のぬ^ぬ深^{こほ}ま^まに^に隈^{かゝ}雜^{ざつ}彙^{ゑい}漏^{ろう}ま^まも^も同^{どう}ぐ
ま^ま役^{やく}者^{しや}も^もさ^さの^の受^うけ^けの^のも^もの^の於^おけ^けも^もの^の校^{きやう}去^き二^に入^に
よ^よせ^せさ^さの^のも^も山^{さん}東^{とう}の^の斤^{しん}も^も足^ある^るぬ^ぬ瘦^{せう}腕^{わん}で^であ^あら^ら
る^るの^の川^{かわ}も^も昔^{むかし}編^{ひん}の^の後^ご帙^{しやく}四^し冊^{まふ}を^を継^{つぎ}続^{つづ}の^の梅^{うめ}と^と枝^え
を^を馬^{うま}も^も守^{まも}り^りし^した^た独^{ひとり}に^に種^{しゆ}兄^{けい}の^の作^{さく}意^いの^のう^うも^も傍^{はう}

小引ひら之の女房おんなぼう小梅こばい亦また愚おろ素す行ゆ筆ふで之の世よ只ただ吉きちの
也なり吉きち判はん之の事こと也なり

文政九戌歳初春

狂訓亭行總下小おのり

南仙笑楚満入戲題

